

Secrecy : How and Why it is maintained

Conversations with Dr. Steven Greer

www.WorldPuja.org

Friday February 8, 2013

Dr. Steven Greer and Commander Will Miller, US Navy retired

秘密：なぜ，どのようにして，それは守られるのか

グリア博士と語る

ワールド・プジャ・ネットワーク

2013 年 2 月 8 日（金）

スティーブン・グリア博士とウィル・ミラー米国海軍中佐（退役）

（ [SiriusDisclosure](#) のウェブサイトに掲載された筆記録より ）

スティーブン・グリア (SG) : 皆様こんにちは，‘グリア博士と語る’ によろこそ。私はスティーブン・グリアです。私は公開プロジェクトと CSETI（地球外知性体研究センター）の責任者をしています。また，皆様よくご存じのように，私たちは映画 ‘シリウス’ の制作を開始しました。映画は春には完成させなければなりませんので，今その仕上げにかかっています。私たちはこの番組に隔週出演し，取り組んでいるすべてのプロジェクトについて世界の最新情報を皆様にお伝えしています。ワールド・プジャ・ネットワークの皆様がこのような場を私たちに提供してくださっていることに対し，感謝を申し上げたいと思います。私たちは新しいウェブサイトを開設しました。そこでは，これらのすべてのプロジェクトが，いわば一つ屋根の下に置かれます（インターネットの屋根ですが）。そのウェブサイトは [SiriusDisclosure.com](#) です。ですから，皆様はここを訪れて，映画に関して私たちが今何をしているのか，また新エネルギーへの取り組み，公開（ディスクロージャー），CSETI コンタクトの活動や計画はどうなっているのかを知ることができます。さて，今日私はここにある方をお招きし，とてもわくわくしています。これまでこの番組にお迎えした中では，おそらく最も重要で特別なゲストだと私は考えています。彼は際立った誠実さを持ち，公開プロジェクトがこれまで遂行してきたいくつかの大変重要な仕事に関わり，援助してきました。また，20 年以上にわたり親友であり，協力者でした！ 実は，私たちが会ったのは 1991 年だったと思います。彼の名前はウィル・ミラー中佐で，退役した米国海軍将校です。彼はきわめて緊密に私と行動をともにし，UFO および異星人問題に関する情報を私たちの軍の最高位にある一部高官に伝えたり，米国内で持たれた説明会や会合を準備したりすることに助力してきました。私が思いますに，彼は公開プロジェクトの最も重要な助言者でもありました。機密プログラム，最高機密プログラム，またこれについても私たちは踏み込むつもりですが，特殊接近プロジェクトについて，機密システムがどう機能するのか，一般社会の認識に対比して現実はどうなのか，こういったことを私たちが理解するために助言を与えてきました。ミラー中佐には，この番組にご出席いただ

き、感謝を申し上げたいと思います。ウィル、今日はおいでいただき、ありがとうございます！

ウィル・ミラー (WM) : ええ、どういたしまして、スティーブ！ あなたとお話ができることを喜んでいます。

SG : それでは、機密プログラムがどのようにして秘密を保つのか、これについて話していただけますか？ 視聴者の皆様がおよその状況を理解することになれば、素晴らしいですからね。私が入りに理解してほしいのは、政府とはどのように機能するものなのか、またはこの番組でさらに踏み込んでいきますが、ある種の問題に対して政府はどのように機能しないのか、しかし一方では軍や情報組織の内部で機密プログラムというものがどのように設計されるのか、ということなのです。それをあなたに話していただけないかと思うわけです。あなたはそのことに関して、大変深い知識を持っていますからね。

WM : よろしいですとも！ 秘密および機密に関しては、多くの誤解があります。特にこのUFO、異星人の主題に関してはそうです。まず、このように言う多くの人があります：“そうさ、何事も機密にされるべきではないんだ。政府は持っているファイルをすべて開放し、私たちが望むものは何でも提供することができるべきなんだ” 明らかに、一部のプログラムにおいては国家情報や、公開されると国家に重大な損害を与える情報を守るために、機密、合法的な機密が必要とされます。私たちは、原子爆弾のつくり方についてすべての情報をドイツ人が手に入れることを望まなかったでしょう！ もしそうであったなら、それは第二次大戦の結末を変える深刻な問題になっていたでしょう。それはさておき、人々がしばしばこう言うのを耳にします：“うん、このプログラムは超最高機密 (above top secret) に違いない” 実際には、軍では三つのレベルの機密分類があるにすぎません。部外秘 (Confidential)、機密 (Secret)、そして最高機密 (Top Secret) です。

SG : そのとおりです！

WM : それらの機密分類は、もしそれが公開されたなら政府にどんな種類の損害を与えるかという、ある基準にもとづいて個人、それを機密にした個人がそのレベルを決めるわけです。また一方では、取扱注意というものもあります。マル秘 (Eyes Only) のようなものです。ですから、あなたは秘密：マル秘情報、秘密：ORCON (ORiginator CONtrolled：起案者管理) を持つこともできます。言い換えれば、その機密情報を作成した個人のみが、誰がそれを見るのかを制御するのです。

SG : そうです。

WM : それからまた、ESI (Especially Sensitive Information：特別機密情報)、さらにはNOFORN (No Foreign：国外禁止) 配布というのもあります。そして次には、コズミック最高機密 (Cosmic Top Secret) という言葉もよく聞きますが、このコズミック機密

分類というのは NATO（北大西洋条約機構）独自のものなのです。こういったことはさておき、では秘密は軍内部でどのようにして守られるのか、という主要な問題があります。特に私たちが特殊接近プログラム（Special Access Programs： SAPs）と呼ぶものに関してです。さて、あなたは何らかの機密分類を持つ特殊接近プログラム（SAPs）を持つことができます。SAPs の大部分は、私が先ほど述べた何らかの取扱注意を持つ、最高機密です。その機密システムが機能するしくみは、こうです。もし、ごく少数の人々だけがそれについて知る必要がある機密情報があると、一つの特特殊接近プログラムがつけられます。つまり、あなたがそのプログラムについて知識を得たい場合、特殊なアクセス権限を持たなければなりません。ですから、たとえあなたが最高機密取扱許可を持っていたとしても、その特定の SAP の知る必要性（need-to-know）を持たなければ、あなたはそれにアクセスすることができません。よろしいですか？ このようなプログラムを持つことには、良い点と悪い点があります。良い点の一つは、その情報を、いわば ‘誰からも見えないところ’ に隠しておけることです。その情報を誰が知るのかを、あなたが制御できるわけです。しかし同時に、あなたはしばしば他の特殊接近プログラムに取り組む人々がいることを知りません。それはあなたのプログラムに役立つ情報を持っているかもしれないのです。このようなことが起きるのは、二つのプログラムが混じり合わないからです。

SG： そのとおりです。

WM： それからまた、あなたの SAP の中のあなたに役立つかもしれない情報または技術にアクセスすることを、あなたはしばしば拒否されます。特殊接近プログラムがどのようなしくみかといえば、まあこのようなものです。そして一般論として、一旦あなたが機密分類のあの経路に入り込むと、大抵の場合他の特殊接近プログラムにもアクセスすることができます。言い換えれば、一旦あなたが ‘読み込まれる（read in）’ と、あなたは文書にサインし、多くの場合自分の命を永久に譲り渡すことになるのです。その意味は、あなたは生きている限りその情報を公開することができないということです！

それでは、話題を USAPs（Unacknowledged Special Access Programs： 認められざる特殊接近プログラム）という別のカテゴリーに移しましょう。さあ、話はここから面白くなります。

SG： そうですね。

WM： それらは認められていないのです。ところで、議会は ‘すべて’ の機密プログラムを監督しています。建前上は、ですね。それが USAPs であってもです。その USAPs を追跡し、監視する、最高レベルのアクセス権限を持つ人物が一人いなければなりません。しかし残念ながら、常にそうであるとは限らないのです。

SG： ええ。

WM: ですから、その存在が完全に認められていないプログラムがあるのです。それを作成した人と、その認められざるプログラムに読み込まれた人々以外に、それについて知る人は誰もいません。それは悪用につながる可能性があります。そして、本来は別の分類であるべきプログラムや活動が、不適切な機密分類になることがあります。ですから、未確認飛行物体 (UFO)、地球外知性体 (ET)、それに関連する技術情報を私たちが最も発見しそうな場所は、認められざる特殊プログラムの領域なのです。

SG: これは私が公開プロジェクトの証人たちから得た情報の一つですが、USAPs は 1950 年代に始まりました。実際に、私は海軍研究所のある上級科学者からその日付まで教えられましたが、1954 年 10 月にこの情報の一部が認められざる領域 (unacknowledged area) の区画に移ったのです。その領域はとても大きく強力になり、議会または大統領の監督というレーダーから外れました。そして、これについても私たちは論じるつもりですが、軍や情報機関の一部高官の監督からも離れました。それはまさにフランケンシュタインのように起き上がり、手術台から立ち去ったのです！ 次に述べることは、私が 1990 年代、クリントン政権のときに遭遇した事実です。私はクリントン政権のときの初代中央情報局長官 (CIA 長官) に背景説明をしましたが、彼は私にこう打ち明けたのです： 彼と大統領はこの UFO の主題について知ろうと試みたことがあった。しかし、何も教えられなかった。実際には、何も存在しないと教えられた。そうでなければ、アクセスを拒否されたと。その後で、ある人物 (CIA のために働く人)、彼は 1990 年代に遡り私に公開プロジェクトを始めるように勧めた人ですが、彼は私が CIA 長官に背景説明をした後で、綿密な調査を行ない、この種の行き過ぎた区画化の問題を論じ始めたことと認めました。このことは、私の心にアイゼンハワー大統領が言ったことを思い起こさせます。アイゼンハワーはこう言いました：“軍産複合体を警戒せよ” 彼は、歴代大統領の中でもきわめて愛国的かつ保守的な共和党员でありましたし、(知らない人のために言っておきますが) 五つ星将軍でした。その他に五つ星将軍は一人もいません。(現時点で、私たちは五つ星将軍を持っていません) しかし、アイゼンハワーが軍産複合体を警戒せよと言ったとき、これは私の理解なのですが、それは 1954 年とアイゼンハワー政権が終わる 1961 年 1 月の間、まさにジャック・ケネディーが政権につく直前に、これらのプログラムの多くが実に自らの意志を持って歩き始めました。その理由は、今人々が UFO と呼んでいるものの背後にあるエネルギーおよび推進システムの科学技術、そのかなりの部分を彼らが解明したからです。その頃それは UFO とは呼ばれていませんでした。それらは実際には空飛ぶ円盤 (flying saucers)、地球外輸送機 (extraterrestrial vehicles)、などと呼ばれていました。これが、UFO がどれほど重大な問題になったかを人々が理解するための、歴史的背景の一部です。

WM: そうです、そうです。そして今あなたが述べたように、これらの特殊接近プログラム (SAPs)、その中でも認められざる特殊接近プログラム (USAPs) の多くがそうですが、彼らはその資金を結局は納税者から引き出しているのです、そうでしょう？ その資金は国防予算を経由してやってくるからです！

SG: そのとおりです。

WM：USAPs, これはことあるごとに小さな電気掃除機として振る舞います。他のプログラムの年度末予算を吸い上げるのです。ですから、その資金の流れを追跡することは、不可能とは言わないまでも、きわめて困難です。しかし、UFO および地球外知性体の主題に足を踏み入れた場合、一般社会には二つの認識があります。一つは、軍の最高位にある指導者たちはこれについて知っているはずだということです。

SG：そうです。

WM：それから、軍の指導者たちはすべての情報にアクセスする権限を持っているはずだということです。私たちが知ったところでは、それはまったく事実ではありません！ それを確実にするために、軍や文民の最高位にある指導者たち（国防情報局長官のような）はこの UFO/ET の主題に関する知識から保護されているのです。ですから、もし情報公開請求（FOIA 請求）や議会の調査があったとしても、彼らは良心に恥じず誠実に、どのような場に出ていっても“私はその主題については何も知りません”とすることができるのです。彼は本当に正直にそうしているのです。彼は知っていません。彼は保護されているからです。その一方では、組織のどこかに大量の情報を持ち、それを管理している人物がいます。多くの場合、それは軍属の上級職員です。軍の指導者たちはやって来ては去っていきますが、その人物はその地位にとどまり続けます。

SG：ええ。私はそれを常任官僚組織（Permanent Bureaucracy）と呼んでいます。それは、たとえば2年か4年か6年ごとに入れ替わるCIA（中央情報局）長官、または国防情報局長官、（知らない人のために言っておきますが）それは国防総省内のCIAのようなものですが、そういった人たちとは対照的に存在しています。それはとても巨大で、CIAとは別の、自ら情報収集・分析能力を持つ国防総省内の組織です。これは私が知ったことなのですが、そしてもちろん私はこれをこれらの人物たちの何人かと直接会って知ったのですが、彼らがこう言うとき、彼らは嘘をついているわけではないのです：“正直に言いますが、私たちはこの主題について何も知りません！” 実際に、私たちは質問したことがあります。しかし、何も答えてもらえませんでした。これはあるケースですが、私はこれらの認められざる特殊接近プロジェクト（USAPs）の区画のいくつかについて、そのコード番号と名前が書かれた国家偵察局（NRO）の文書入手しました。私はある提督のことを覚えています。彼はそのUSAPsの一つを見つけ出しましたが、基本的にこう言われました：“ええ、あなたが誰であるかはよく存じております。しかし、あなたは知る必要性（need-to-know）を持っていません。ですから、私たちはあなたに何も教えるつもりはありません” これは、私が言うところの合法的秘密（これはウィキリークスが侵入し引き出している種類の物事で、いわば通常の秘密）と非合法的秘密または違憲的秘密ということに関わってきます。非合法的秘密については実に多くの本が書かれており、そしてこれは、もしこれが監督されていないとすると、誰が鶏小屋の番をするのか？ 誰が店番をするのか？ という観点から、民主主義における大きな懸念となります。その例を一つ挙げましょう。最近私は、ワシントンで一人の人物に会いました。彼は政府からの受注契約を監査

する大手会計検査／経理会社 3 社のうちの一つの会計検査員でした。彼はノースロップ・グラマン社、この会社の前身は私の叔父が勤めていた会社でしたが、そこの監査を担当することになりました。彼は基本的にこう言いました：彼はすべてのプログラムに対する監査許可を持っていましたが、それにもかかわらず、“私たちがしていることの細部について、あなたは知る必要性を持っていない”と言われたと。だから彼は、彼らが公金を使って何をしているのか、またそれがどこに支出されているのかについて、彼らが話していたことにめくら判を押すことになったでしょう。そうすると、このようなシステムの抑制と均衡は本当にどこにあるのでしょうか？

これが、遡って 1994 年に起きたことの理由です。ウィル、あなたがこの話を知っているかどうか知りませんが、それはこの年のちょうど今頃でした。私は（*1993 年に）CIA 長官に会った後で、ニューヨークにいる何人かの国連関係者と会合を持ちました。そのとき私は、上院歳出委員会の会合に行くように求められました。当時その委員会の主席弁護士はディック・ダマトという人（上院議員のダマトとは関係がありません）で、彼は上院歳出委員会の議長をしていたウェストバージニア州選出のバード上院議員と共に働いていました。私たちは巨大なテーブルのある大きな部屋に座っており、それぞれの上院議員の席には真鍮製の名札がついていました。この場に出席していたのは、あるシンクタンクの所長、私、そして最高機密取扱許可および上院歳出委員会の召還権限を持つこの主席弁護士でした。彼は私にこう言いました：彼は ET および UFO に関係する物事が進行中である証拠を見ていたが、米国政府の予算審議をした上院歳出委員会の召還権限および最高機密取扱許可をもってしても、それらに分け入ることができなかったと。彼は私の目を直視し、こう言いました：“グリア博士、あなたは闇のプロジェクト（彼はそう呼びました）すべての代表チームを相手にしています - 幸運を祈ります！”それから彼は私に、その当時の私にはあり得ないと思われたことを、こう打ち明けたのです：“いいですか、私たちの結論では、どこに流れているのか不明な資金が年間 1000 億ドル以上あります”さて、これがあったのは 1994 年です。13 年前 - 失礼、19 年前のことなのです！もちろん当時は、10 億ドルが今日の 10 億ドルよりも価値がありました。これを次の 10 年間、つまり 8 年後に起きたことと結びつけるならば、国防長官のラムズフェルドは 9/11 の前日にこう言いました：“この数十年間に、国防総省予算から約 2.3 兆（T のつく trillion, 兆です！）ドルが消えている。その用途はまったく不明である！”

今あなたは多額の資金、容易ならざる権力を論じていますが、これをどこの誰が監督しているのか、そのようなことを今私は述べたわけです。

WM: そのとおりです！それは興味深い点です。私が（*米国海軍）大西洋軍で働いていたとき、いくつかの作戦プログラムを扱っていました。それらのプログラムは多くの他機関の支援を受けたもので、そのうちの一つに国家安全保障局（NSA）が含まれていました。私はいくつかのプログラムに関わっており、技術支援の予算を担当していました。ある日、私は一枚の紙を渡され、五つほどの機密プログラムを承認するように求められました。それには ‘ブルーフラッシュ（Blue Flash）’ とか ‘ワンダースフェア（Wonder Sphere）’

のようなコードネームがついていましたね。それで私はこう訊いたのです：“これらのプログラムは何をしているのですか？” 彼らはこう言いました：“申し訳ありませんが、あなたには知る必要性（need-to-know）が許可されていません。あなたは知る必要性を持っていません。しかし信用してください、これらのプログラムはあなたがたの作戦を支援するものです” [二人とも笑う] 私はこう言いました：“いいですか！ 私はこれらを認定できません。これらを正当化できません。それらのプログラムが何をしているのか知らないうちは、それらを承認できません” 激しい応酬がありました。私はこう言いました：“いいですか！ 大西洋軍は承認しないと NSA 長官に言ってください。少なくとも私のオフィスは、それらのプログラムに誰かが読み込まれる（read into）までは、承認しません” 案の定、彼らは人を送ってよこしました。私たちは安全な情報施設のドアの後ろで席に着き、それから彼らは私たちを読み込み（read in）ました。私たちは何枚もの書類にサインし、再び自分の命を譲り渡さなければなりませんでした。ところが、確かにこれらのプログラムは実際に私たちのためになる何かをするものであることが分かったのです。しかし私は、一体それが何であるのかを知らないうちは、それを保証するつもりはありませんでした。そうでしょう？ ですから、誰もがそのようにするわけではないのです。

SG：そうです，そうです。

WM：しかし、そのことはもう一つの分野につながっています。一部の資料にもあり、また一般の多くの人々が信じていることは、軍が UFO の主題を実際には真剣にとらえていないということです。これは私の経験の中ではずっとそうでしたし、あなたの経験でもそうですが、軍は UFO 問題を ‘きわめて’ 真剣にとらえています！

SG：まったくそのとおりです！

WM：実際に、もしよろしければ私はそのいくつかの具体例についてお話ししたいと思います。

SG：ええ、よろしいですとも。是非お話しください。

WM：私たちは、UFO の主題が論じられたいくつかの会合を持ったことがありました。そこでは非常な関心が示されたのみならず、激しい議論が起きました。私は 1989 年のことから始めたいと思います。これをあなたに話したことがあるかどうかは分かりませんが、私は米国宇宙軍への連絡係として働き、シャイアン山の内部で約一週間過ごす機会を持ちました。そこは、シャイアン山の中心部にあったにもかかわらず、シャイアン山空軍と呼ばれていました。

SG：そうです。

WM：そこには、水上スキーができるほど大きないくつかの湖、いくつものかまぼこ扉、

第三次大戦時にはゆらゆらと揺れることになる（それを期待した）、スプリング上に建てられたいくつかの三階建てビルがありました。それはともかく、彼らはその宇宙軍司令部に巨大な追跡操作卓を持っており、そこには追跡される54種類の物体分類がありました。そして私たちを案内して回った海軍中佐は、最高機密区画接近許可（Top Secret Compartmented Access Clearance）を持っていました。彼は基本的に‘全能者（Almighty）’（分かりますか？）と話すことのできる資格を持っていました。彼は私に“何か見たいものはありますか？”と訊きました。私はこう言いました：“そうですね、ここにボタンがあって、それを押すと‘外国の輸送機’と表示されるのですよね”彼がそのボタンを押すと、案の定、ニューヨークに向かうルフトハンザのフライトが表示されました。それはとても興味深いものでした。彼が“他には？”と訊くので、私は“そうですね、それでは54を見てみましょうか、分類54、UFOです”そこで彼が操作卓のそのボタンを押すと、即座に‘アクセス拒否’が表示されました。

SG：何ですって？

WM：これは本当に興味深い、私はそう思いました。

SG：そうですね。

WM：なぜかといいますと、ここにどんなことも[あらゆるものを]見る許可を持っているはずの人物がいた、しかしUFOは許可されなかったのです！

SG：UFOは許可されなかったと！ そうでしょうとも。

WM：それでは、それから数年後の1992年のことに移りましょう。私には大西洋軍情報局長（J-2）と話す機会がありました。このとき私は親切心から、ある情報を彼に知らせたいと思い、簡単な状況説明をしたのです。それはCSETI（地球外知性体研究センター）がUFOの主題に関して世界的規模で取り組んでいた活動の一部についての情報でした。それは一般的に言って、彼にはアクセスできないだろうと私には思われた情報でした。[クスクス笑いながら]彼が情報局長であったにもかかわらずです！ 私たちは[潜水艦情報について]話しました（彼は潜水艦乗りでもありました）。ある時点で私はこう訊ねました：“提督、あなたは大きな空母ほどの大きさを持ち、音速に近い速度で移動する水中物体について、潜水艦情報部から上がってきた何かの情報に接したことがありましたか？”もちろん、それはきわめて異常な事件です。すると彼は私を見て、こう言いました：“そうだね、ウィル、君も知っているとおりの、時々奇妙な報告がある。しかし、そのような‘コンピューター’の誤動作は常にあるものだ”それっきり、私たちは別の話に移りました。

SG：[笑う]

WM：それは、ちょっと興味深いことでしたね。

SG：そうです，興味深いことです。“うん，それは異常なことだ。それについて我々は話したくない”

WM：まさにそのとおりです！“ああ，そんなことも起きるだろうさ，でも明らかにそれは単なるコンピュータの誤動作だ”

SG：そのとおりです。私たちの公開プロジェクト証人の一人は，実際に潜水艦に乗っていました。彼らが任務に出たとき，水中にこれらの物体を二つ発見しました。そして彼らの実際の任務は，潜航して，彼らが遠回しに‘水中の磁気異常’と呼ぶその物体を追跡することでした。それで彼らは，これらの磁気 [異常] を探して回りました。すると案の定，これらの一つが接近してきました。それから二つになり，それらはこの原子力潜水艦を両側から挟み，その駆動系を遮断しました。基本的に彼らは，上昇も下降も，前進も後退も，まったく何もできなくなりました。そしてある時点で，彼らはこれらの物体の一つが 450 ノットの速度で水中を移動する様子を追跡したのです！ さて，参考までに言いますと，これは基本的に空気中のジェット機の世界速度です。しかし，この物体は水中にありました。とにかく，水は空気より千倍も密度が高いのです。しかし，彼はこう言いました：“何の航跡も残さず移動した”

WM：そうです！

SG：ですから，これらの物体が作動するしくみは，物体が時空の泡 (space/time bubble) をつくり，その中で移動するということです。これは水にも空気にも乱れを生じません。それは一目瞭然で，とても興味深いことだったと [そう彼は言いました]。[背後で携帯電話のチャイム] アイスクリーム・トラックみたいですね！

WM： あっ，いやいや，私の電話の着信音でした。失礼しました。

SG： いえ，構いませんよ。ですから，それは本当に興味深いことです。まだ他にも会合があったのですよね。それらの会合についても是非聞きたいものです。

WM： ええ，よろしいですとも！ 私が大西洋軍で働いていたとき，しばしば国防総省まで出かけて行く必要がありました。そのときは，ノーフォークから D.C. (ワシントン D.C.) までヘリ [ヘリコプター] で行き，国防総省の正面にあるヘリポートに着陸したものです。大抵の場合，私は元大西洋軍情報局長に会うために，そこに立ち寄ることにしていました。彼は今や，統合参謀本部情報局次長の立場にありました！ 私は彼に会う約束をし，CSETI (地球外知性体研究センター) の活動についてのある案件を提起する，ちょうどよい時期だと考えました。というのは，私があなたの軍側の助言者として働いていた頃，私たちは CSETI がしていた野外での活動について，了解を取り付ける人物 (または部署) を国防総省内に見つけたいと思っていたからです。その頃国防総省は，多くの麻薬取締作戦に関わ

っていましたし、CSETI のチームはといえば高出力のライトやレーザー装置を持っている人々がいましたからね。私たちは麻薬押収を邪魔したくはなかったし、私たちがしていたことを彼らに知っておいてもらいたかったのです。それで私は、提督に話しました。私はこう言いました：“ところで提督、別の案件ですが、これは仮の話です。今ここに、実際に野外で地球外宇宙機と交信し、誘導する活動をしている退役軍人、現役軍人、元宇宙飛行士、上級技術者、民間人といった人々のグループがあり、彼らがその活動について国防総省の了解を取り付けたいと思っているとしたら、誰に話をすればよろしいでしょうか？もちろん、単なる仮の話です！”提督は目を細め、私を見、こう言いました：“これは仮の話ではない。現実だよ、ウィル”私は言いました：“ええ、提督。正直に申し上げますと、それは仮の話ではありません”彼はこう言いました：“いいかい？君が話したいと思う人々のことを私は知っていた。私に 24 時間くれたまえ。そしたら君に連絡する”こうして私はノーフォークに戻りました。果たして提督の補佐官が私に電話をよこし、こう言いました：“空軍諜報軍（当時は AFIAANT と呼ばれていました）（*米軍事用語では AFIC）にいるある中佐の電話番号です、彼に連絡してください。彼があなたにその関係者を紹介するでしょう”それで私はこの中佐に電話をしました。電話に出た彼は、この案件について私と話すように指示されたことがとても不愉快で、少しも嬉しくない、はっきり言いましたよ。[クスクス笑]

SG：[大笑いする]

WM：しかし私は、ライト-パターソン空軍基地にある外来航空宇宙科学技術センター（当時は FASSTC）（*米軍事用語では FASTC）の所長に電話をすることになりました。そしてここから私は先に進むことができたのです。私はライト-パターソン空軍基地にいるこの大佐に電話をしました。あなたも覚えているかもしれませんが、私たちは会合を設けました。あなたと私、それに FASSTC（Foreign Air Space Science and Technology Center）のスコット・ジョーンズ博士という人だったと思います。私は彼らに CSETI が何をしているのかを説明し、私たちの活動について了解を取り付ける部署があるのかどうか、訊ねました。その会合は、とても興味深いものでしたね。

SG：ええ、そうでした！

WM：というのも、私たちは彼らに背景説明の書かれた本を 2 冊提供しましたし、その所長はそれから異動になり、後任者と接触するよう私に言い残したからです；その後任者も 30 日以内に異動になり、こうして基本的に、会合で話し合われた記録のすべてがブラックホールの中、混乱の中へと消え去りました。これは私の理解ですが、その情報は何年も経ってから、ホワイトハウスのスタッフにより再び明るみに出ました。しかし私は、1997 年にその統合幕僚（Joint Staff）（J-2）で情報局長（Director for Intelligence）と会合を持つことができ、喜んだものでした。

SG：そうでした。ここでミラー中佐が言及しているのは、統合参謀本部の情報局長（Head

of Intelligence for the Joint Chiefs of Staff) のことです。国防総省ではそれを統合幕僚 (Joint Staff) と呼びます。

WM: そうです, そのとおりです。その会合にはあなたと私, それにエド・ミッチェルもそこにいたと思います。

SG: そのとおりです。

WM: 特にエド・ミッチェル宇宙飛行士, そして提督が, この背景説明を他の国家安全保障, 国家情報事案と同じ重要性を持つものと受け止め, 関心を払いました。ですから, 人々が軍はこの主題に関心を持っていないと言うならば, それは明らかに事実と異なるし, 私たちの経験でもこれまでずっと事実ではありませんでした。

SG: 事実ではありません。そして実際に, 私は覚えているのですが, 私たちの会合には一定のまとまった時間がとられ, 提督は彼の補佐官の方を振り向いては, これはキャンセル, あれもキャンセルと言い続けていましたね。会合は時間を延長して行なわれました。というのは, そこで話されていることに提督は多大な関心を持っていたからです。

WM: そうです。これにはちょっとした興味深い余談もあります。私がある場を去ろうとするとき, 提督の補佐官が私の方を向いて, こう言ったのです: “ところで, マジェスティック (Majestic) (MJ-12) の主題が話題に上りました。それが現実にあるのか, それともかつて存在していたのかが大いに議論されました” そしてこう続けました: “それが今も存在していることを私たちは知っています。しかしこの統合幕僚の情報部にいる私たちが, 彼らが何をしているのかを ‘知る必要性 (need-to-know)’ を持っていないのです” この発言は, 私にとり大変興味深いものでした。

SG: とても重要な発言です。そして, 私が持っているこの 1990 年代初期の国家偵察局 (NRO) [文書] を見れば, 具体的に MAJIC, Cosmic Ops, 様々なコード番号やコード名の一覧が記載されています。これが本物の文書であることを私たちは知っています。

WM: 間違いありません。

SG: そして文書は, 基本的にネリス空軍実験場, [不明瞭] メサ, S-12, S-4, S-3, グルーム・レイクにおける機密保全誓約違反への警告でした。これらの場所では, この一覧のすべてに関係する, きわめて機密性の高い航空宇宙分野の研究開発活動が数多く行なわれているのです。一般の人々はそれを不正確にもエリア 51 と呼んできました。しかし内情を知る者は誰もそう呼びません。しかし要するに, この文書にはその実験場における機密保全誓約違反の警告配布先が実際に一覧として記載されており, MAJIC はその一つだったということです。

WM： そのとおりです。私たちが国防総省で持った別のさらに興味深い会合の一つは、国防情報局長官とのものでした。私たちは、背景説明資料の一部を長官に手渡すまで、その会合を持つことになるとは考えもしませんでした。突然私に電話がかかり、こう言われました：“よく聞いてください、私たちはあなた方に会いたい、それも今すぐにです” それで私たち（あなたと私）は国防総省まで出かけていき、長官と会いました。電話をしてきたのは彼のスタッフのうちの二人だったと思います。

SG： そうです。

WM： 長官は、私たちが持参したその背景説明資料を受け取り、大変な興味を示しただけでなく、今は触れたくないある個人情報をも私たちに伝えました。それは彼が個人的に、また情報専門家としても、この主題に並々ならぬ関心を持っていることを示すものでした！ しかし彼は DIA（国防情報局）長官として、UFO および地球外知性体の主題に関する何らかの背景資料を入手することができないか、自分のスタッフや手下、さらには他の関係する政府機関に頼んでいました； 彼は机から立ち上がり、こう言ったのです：“さて諸君、私が受け取った唯一のものがこれでした” 彼は書棚まで歩いていき、とても小さなエイリアンの粘土人形を棚から降ろしました。

SG： そうです、ET 人形のようなものでしたね。

WM： ET 人形！ そう、それでした。

SG： [笑う]

WM： なんだか悲しかったですね。あらためて私たちは彼に、国防情報局長官の地位にある彼はこの主題に関する情報からは保護されるだろうと説明しました。

SG： そのとおりです。

WM： [笑う] それはうまくいかなかったと付け加えておきましょう。

SG： ええ。私たちがそのように説明したことはよく覚えています。というのは、私にはこの課題を任務とする公開プロジェクトの情報提供者が二人いますが、特に彼らは、打ち上げられた私たちの衛星（または‘鳥（birds）’）のいくつかが、上空からこれらの物体（UFO）を撮影した何枚かの画像を見ているからです。ですから、間違いなくあの部隊にはそのような人々がいます。三つ星将軍であるにもかかわらず、長官はその情報を与えられていなかったのだと私は思います。DIA（国防情報局）には、実際にこの主題を扱う区画化されたいくつかの軍事作戦がありますが、彼らは長官に話していませんでした！ 私は覚えていますが、私たちが知ったいくつかの軍事作戦が確かにあり、それについて私は人々に話したことがあり、それらの作戦は国防総省内の国防情報局においてこの（UFO）問題

を扱っており、しかしながら部隊の中にそれを長官に知らせていない人々がいることを私たちが主張したとき、テーブルについていた中佐は、ボディー・ランゲージで体がこわばったことをはっきりと示しましたね。[笑う]

WM： ええ。そうです、そうです。彼は確か後ろの隅の方でノートを取っていました。

SG： 彼は事実が暴露されておもしろくなさそうでしたね。

WM： おもしろくなさそうでした。私は、元 NSA（国家安全保障局）の接触者を通じて、国家安全保障局の高官をつとめて退役した年配の民間人と会う機会を得ました。この紳士ですが - 私たちは UFO の主題について語り合いました。そしてここでもやはり、この主題について情報を持っているか、または関心を持っている、何らかの政府機関があるかどうかということ語り合ったのです。彼はとても興味深い、とっておきの情報を私に明かしましたよ。彼はこう言いました：“NSA（国家安全保障局）にはただ ‘文書（the document）’ としか知られていない一つの文書があり、それは UFO と地球外知性体に関するものでした。それは厳重な極秘情報であったため、長官自身の他に、おそらく一人か二人の人物しか実際にそれを見ることができませんでした”

SG： そのとおりです。

WM： UFO と地球外知性体の存在は周知の事実です。しかし繰り返しますが、それはとてもとても厳重に機密化されている情報なのです。

SG： そうです。きわめて厳重です。さて、面白い話があります。ジミー・カーターが大統領選に勝って就任するまでの、政権移行期間中のことです。彼らは必ず、新大統領と現職大統領、そしておそらくは退任する CIA（中央情報局）長官と会合を持ちます。このときの CIA 長官はジョージ・H・W・ブッシュ（ブッシュ・シニア）でした。カーターはこの UFO 問題について説明を受けたいと思いましたが、ブッシュはカーターにこう言ったのです：“ええ、私はこの問題について、‘あなたには’ 何も話すつもりはありません” このときカーターは、ホワイトハウス内に UFO 問題の研究グループを立ち上げようとしていました。そのため、当然ながら、研究グループの設立は取り止めとなりました。カーターのある友人（ジミー・カーターの友人）の話です。私は先週か二週間前の（*オバマ）大統領就任式でジミー・カーターを見たばかりですが、このときカーターはスペインに滞在していました。公開プロジェクト支持者でもあるこのクラシック・ギター奏者と一緒に、クラシック・ギター工房から出てきたギターにサインをしていました。そして彼らは、アトランタ市にあるカーター・センターの資金集めをするため、彼のサイン入りギター、つまり大統領自署入りのギターをオークションにかけていました。その後で、夕食会に 20 人ほど集まりましたが、カーター大統領もそこにいました。誰かがこう訊きました：“世界最高の権力者とは、どのようなものでしたか？” カーター大統領はこう答えました：“私がその権力者だったとは思いません”

WM：[笑う]

SG：“それが存在し、進行中であることを知りながら、私がアクセスできなかった事柄がありました” 誰かがこう言いました：“驚きました、本当ですか？ どのようなことですか、UFO ですか？”（クスクス笑い、あざけり、冷笑のようなざわめきが起きる）カーターは彼らを制止し、こう言いました：“そうです、そのことです。他にもまだありました”

WM：そうです。

SG：その場にいた私の友人によれば、そのときは部屋で一本の針が落ちててもその音が聞こえるほどだったと。なぜなら、最初人々は大統領が冗談を言っているに違いないと考えたからです。彼は冗談を言っていたのではありませんでした！これがクリントン大統領にも起きたことを私たちは知りました。これはウェブスター・ハッベルが大統領から[この問題の]調査を任されたときの話です。ハッベルは司法省の序列三位の地位にありました。さて、ハッベルが大統領から頼まれたのは、二つのことでした。それが彼の著書 '*Friends in High Places*' に書かれていますので読むことができますが、第一に、本当は誰がジャック・ケネディーを殺したのか？そして第二が、UFO に関して何が進行しているのか？UFO とは何であり、何が起きているのか？ということでした。

WM：間違いありません。

SG：ウェブスター・ハッベルは、基本的には戻ってきてこう言いました。それを著書から引用すると、彼はこう言っています：“私の調査チームに対してなされた返答に私たちは不満だった” ハッベルはとても直接的な言い方で“私たちは嘘をつかれていることを知った。私たちは間抜けではない...”と述べました。しかし、彼らは何の答も得ませんでした。本当にこれは[私が初めて聞く話でした]。私はそのことをまったく知りませんでした。いいですか、そのときの私を想像できるでしょう。私は 35 歳で、その内容が何であろうと、CIA 長官に背景説明をしている。そして合衆国大統領のために、この入手可能な最良の証拠資料をまとめようとしている；私は救急医をしており、4 人の娘と一匹のゴールデンレトリバーがいる。

WM：ええ。

SG：私はやや[自分が関わっていることに圧倒されている]。よろしい、まず初めに言わなければならないことがあります。私の CIA 長官への連絡窓口が私にフェデックス(Fed-X)を送ってよこしたとき、私はとても懐疑的でした。それにはこう書かれていたのです：“あなたが、この主題(*UFO)についてクリントン政権およびその CIA 長官に背景説明をする最初の人です” 私は笑ってしまいました。私は妻と顔を見合わせ、こう言いました：“そんなの嘘だ！”彼らは私をそこに呼びつけ、知っていることを話させ、スパイがよくやる

ように私の頭の中身を吸い上げただけなのだ、私はそう考えましたね。しかし私たちが夕食をとり、議論を始めると、次のことが疑いのない事実であることが分かりました：CIA 長官は知らないし、アクセスすることも拒否されている；彼はそのことに動揺し、激怒している；これは憲法の完全な機能停止、合法的指揮系統による監督の破綻であり、まさにアイゼンハワーが(50年以上前に遡り)1961年に退任演説で国民に語ったことであると。ですから、言ってみれば私たちは一周して元に戻ったが、何も変わっていなかったようなものです。

実はそのことが、1992年か1993年と2001年の間に、私たちが多くの人々の援助を得ながら、議会の適切な人々に背景説明をすることに最善を尽くすきっかけとなりました（私は視聴者の皆様に少し全体の流れを語らなければなりません）。援助してくれた人々の中では、今日このラジオ番組に出演しているミラー中佐が主役の一人でした。私はいくつかの委員会の議長、上院情報委員会のメンバー、あらゆる階層の人々、国内外を問わずそのレベルの人々と会いました。彼らがこの問題を取り上げ、調査し、その情報を公開し、これらの（*ET）文明と平和的にコンタクトする道を開くように、しかしまた、これまで50年か60年間にわたり研究され開発されてきた有益なエネルギー発生技術が世に出て、人類の利益となる道を開くように、彼らを促すためでした。そして分かったことですが、私はこう考えていました（35歳の私がいかに純真だったかということです）。もし私たちがこの立証された肯定的証拠、文書、証言、写真を提供したなら、これらの人々は行動を起こすことができるだろうと。しかし、そうではありませんでした。知ることとアクセスすることは違うのです。私たちが証拠を提供したなら、誰かはこの主題について知るかもしれません。彼らはプロジェクトのコード名とコード番号を私から入手するかもしれません。しかしそのことは、その高官、その大統領、その上院議員、または他の誰であれ、その人物がその区画および作戦に実際にアクセスし制御するようになることを意味しません。それらは二つの別々のことなのです。私は、このことを理解するのに随分と時間がかかりました。ウィル、2年前のことを覚えていますか？ 私たちはフランスからやってきた使節団と会ったことがありましたね。

WM： ええ。

SG： この使節団は、実際とても地位の高い人々で、そのうちの一人は、フランスの情報機関、空軍、および彼らの大統領のために物事をとりまとめる仕事に深く関わっていました。あなたと私が何年もかけて、あの階級（提督、将軍、CIA長官）の人々とこの種の会合を持ち、その彼らは本当に何も知らず、これらのプロジェクトを制御していない、という事実は、彼らにとってショッキングなことのようにでした！ 私は彼らの一人に、こう説明したことを覚えています：“よく聞いてください。私たちは毎年、私たちの情報機関、国防総省、その他の関連する組織の予算を失っています（国土安全保障省を含めると、現在それらを合計した予算額は年間一兆ドルに近づいています）。私たちは毎年1,000億ドルから2,000億ドルの間の予算を失っており、それがこれらの区画に消えています。誰もその行方を知りません。これはあなたの国、または世界のどの他の国の年間予算よりも大き

な額です！”ですから、私たちはそれだけの予算がどこに使われているのか、まったく知らないということです。これは世界全体を見渡した場合の、世界最大の国防予算とも同等の額でしょう！ その中に中国、ロシア、EU のすべての国々を含んでの話です。ですから、これは彼らにとっては目を見張るような、しかし動揺させられる経験であったと思います。

WM： 悪用されかねない富の余剰というわけです。そうです。しかし繰り返しますが、このお金は天からの贈り物ではありません。それは納税者のお金なのです！ 人類の利益になっているはずのプロジェクトに使われている、納税者のお金です。そうすると、そこには技術移転という問題が存在します。長い年月の間に、私は国防総省が使っている技術の中に、いくつかそのような技術があると信じるようになりました。

SG： ええ、そうです。

WM： その例を二つほど挙げましょう。私にはある友人がいて、彼は私と一緒に働いたことのある元軍将校でした。この友人はとても変わった人でした！ 彼は NASA（米航空宇宙局）の宇宙飛行士になるための道を歩んでいましたが、頻繁に離着陸するテストパイロットとして不運中の不運に見舞われました。離陸と着陸の回数は常に同数であってほしいものですが、不幸にも彼はひどい墜落事故に二度遭いました。彼の責任ではなく、装置の故障でした。二度目の墜落では危うく命を落としかけ、宇宙飛行士になるチャンスも失われました。しかし、運命の巡り合わせで、彼らは彼に別の高い地位を与えました。それが、あの有名なグルーム・レイク施設エリア 51 に行くことだったのです。こうして彼はそこに数年間いました。

SG： ええ。

WM： さて、私たちが皆知っているように、そこで働いた人の殆どは自分が関わった仕事について公開しない誓約に署名し、命を譲り渡しています。そしてこの友人は、良くも悪くも、そのような人々と何ら変わりませんでした。私は 3 年間彼と一緒に働きましたが、彼は私が地球外の事柄に興味を持ち、CSETI（地球外知性体研究センター）のために活動していることを知りました。しかし彼は一度として、グルーム・レイクでしていた仕事やそれに関連すること、地球外のことを話しませんでした。私が司令部を去る日、彼は私を脇に呼び、こう言いました：“ウィル、あなたは知っていますか？ あなたが話をする人々の何人か、たぶん CSETI の研究者でしょうが、彼らはマッハ 9 で飛行し、次に突然直角に方向転換をする物体を目撃するかもしれません。彼らは驚いて、あれは地球外宇宙機に違いないと言うかもしれません” 次に彼は、私を見てこう言いました：“しかし、そうではないのです” そう言うと彼はくると背を向け、立ち去りました。

SG： 確かに。

WM： その他にもいくつかの出来事がありましたが、これはそのうちの一つです。グルー

ム・レイクで働いたことのある同僚がいました。彼は私が司令部を去るとき、私にこう言いました：“さようなら、次の任務を楽しんでください。そして 5-4-6-1 です” 私は“何ですって？ その数字は何ですか、ボブ？”と訊きました。彼は“5-4-6-1”と繰り返しました。私が“何の事か分かりません”と言うと、彼はこう言ったのです：“あなたが興味を持っているプログラムの番号です”

SG： そのとおりです。

WM： もちろん、私たちが初めの方で述べたように、殆どの特殊接近プログラム（SAP）はコード名を持っています。もしくは予算分類の中で項目にはたぶん 4 桁か 5 桁の番号がつけられています。

SG： そうです。

WM： ここまでいくつか述べてきましたが、最後は元米国陸軍調達部長の話です。ある深夜、それはコマンチ・ヘリコプター（アパッチの後続機）に関するヒストリー・チャンネルの番組だったと思います。

SG： ええ。

WM： この人物は番組の最後になって登場しました。深夜で、一度だけ放映されました。彼はこう言いましたよ：“ご存じのとおり、コマンチ計画は陸軍が購入する予定の、おそらく最後のヘリコプターです。後続機はすべて、おそらく反重力機となるでしょう” さて、これは本当にぶっ飛びそうな発言です。すべての計画に目を通す立場にある、調達部門の高官がそれを言ったのですから。私たちはすでに反重力の研究開発を行なっている；さらに言えば、私たちはすでに反重力の技術を持っており、新型航空機に搭載するばかりになっていると。

SG： そのとおりです。

WM： ですから、これまで述べたことをすべて考え合わせるならば、人々是这样いいます：“ちょっと聞いてくれ！ 技術移転はこれまで行なわれてきたんだ。でもそれは、一般的に人類の利益になっているかい？” 現時点ではまったくそうなっていません。では、利益になるべきでしょうか？ たぶん、そうなるべきです！

SG： そうです。そしてこのことは、1954 年 10 月に何が起きたのかという、議論の全体に関わってきます。なぜなら、米国が CIA（中央情報局）を組織し国家安全保障法などをすべて成立させた 1947 年と 1954 年の間、主流の航空宇宙文献には、質量や重量を減少させる電磁気／重力高電圧システム、等々の報告が見られたからです。そのような報告のすべてが、1954 年 10 月に、いわば闇の中に消えました。これは私の理解なのですが、そ

うなった理由は、彼らが高電圧システムの現象を十分に解明し、それが使用可能になるだろうことを知ったからです。そして 1950 年代終わりから 1960 年代初めまでに、私たちはその種の技術を利用した、空中を移動し飛び回る物体を持ったのです。今私たちは、そのとき以来数世代を経ています。なぜなら、それからほぼ 60 年後に私たちはこうして話しているからです。確かに、50 年以上の歳月が過ぎました。そしてこれは、私がそのことを裏付ける複数の独立した情報源から確認してきたことなのです。ですから、私が人々に伝える良い知らせは、これらの新エネルギーおよび推進システムは研究され、開発され、すでに存在しているということです。悪い知らせは、ロッキード・スカンワークス所長のベン・リッチが示唆したように、“それらはブラックボックスの中に閉じ込められており、それらを取り出して人類の役に立てるためには、神の業を必要とするだろう”ということです。私が思いますに、これが大問題です。いつ、何が出てくるのでしょうか？ それはどのように応用される可能性があり、その軍事応用は何でしょうか？ 言うまでもなくその理由は、もしここからバグダッドに 2、3 分で行ける物体があるとし、それがここに武器を運搬したい人々の手にあるとしたなら、それは望ましくないものになるからです。他方では、約 100 年間にわたり開発されてきた、静止したままの技術があります。それらの技術は新エネルギーに取り組んだもので、環境的のみならず、地政学的にも私たちの生存を脅かしている石油、ガス、石炭から私たちを脱却させるでしょう。人々は南シナ海やその他の至る所で、埋蔵石油資源や供給のことで争っていますし、インドと中国には、今でも石炭を燃やして電力の 80 パーセント以上を得ている数十億の人々がいます。

WM：そうです、そうです。

SG：それも、汚染物質の除去装置なしにです。つまり、それは産業革命初期の 1800 年代のようなものです。ですから、この秘密のゆえに生じた私たちの技術的發展経路の遅滞は、今や地球に対しても人類に対しても、その生存を脅かすものになっています。こうして私たちは、今ジレンマに陥っています。これが、私たちがこのすべての情報を映画 ‘シリウス’ の中に導入しようと試みている理由です。もちろん、一般向け 2 時間の長編映画の中だけでそれを人々に語ることもできますが、私たちは人々とのその対話をこれまでにない形で拡大していきたいと考えているのです。それが、この映画に取り組んでいる理由です。

WM：ええ。NASA（米航空宇宙局）の将来計画を見ても、彼らはあらゆる種類の先進的推進システムを考察しています。しかし、ロケットを宇宙に打ち上げるのに使う 2000 年前の中国のロケット技術を廃止できるなら、素晴らしいじゃありませんか？

SG：[笑う]

WM：[笑う] そして、それよりも少しだけ効率がよく、汚染の少ないものを持つことができるなら。米国でも他のどの国でも、よく晴れた日に空を見上げれば、あらゆる種類の飛行機雲を見ることができます。もしこの汚染が空にないとしたら、これも素晴らしいこ

とじゃありませんか？

SG： そのとおりです。ですから - 私はいつも人々に冗談を言います。私は多くのハイテク好きたちを相手にしますので、こんなふうに言います： いいですか、皆さんは確かにスマートフォンを持っているし、光ファイバーも持っています。しかしよく考えてください！ それらは 1800 年代後半の石炭火力発電所の電力網から電力を得ているのです。

WM： そうです。[笑う]

SG： 皆さんが乗る飛行機は、実際には 1930 年代に開発されたジェットエンジンです。それからロケット！ よろしい、皆さんはロケット科学者です。ウェルナー・フォン・ブラウンはアドルフ・ヒットラーとナチスのためのロケット科学者でしたが、それは 1940 年代のことでした！ 皆さんは原子力発電所を持っています。結構でしょう。しかしそれは蒸気タービンを動かすために原子を分裂させ、熱を発生させるものです。皆さんが実際にやっていることは、水を加熱し、蒸気を発生させてタービンを回すことです。昔のシュツシユッポッポの汽車が蒸気機関を使ってやっていたことと変わりありません。ただし副産物が違います。皆さんはこの放射性廃棄物を生み出しましたが、これは約 5 万年間または数十万年間、環境に留まり続けるのです。ですから、現実には、エネルギーおよび推進において意味のある飛躍的進歩は 1940 年代以来一つもありません！ 今、私たちは 70 年間のことを論じているのです。何ということでしょう！ 私たちはこの状態に閉じ込められているようなものです。私たちはこのような袋小路、汚水槽にはまり込んでいます。エネルギー発生に関するいわば初期産業モデルの中を、堂々巡りしながらです。その一方で、私たちにはインターネットがあります。また冷蔵庫、輸送、旅行を望む数十億の人々がいます。このことは、ある大問題を引き起こします。なぜなら、私たちはできることの限界に直面しているからです。[ビープ音に続き、短い沈黙] えー、ミラー中佐が帰られたかもしれません。今ビープ音が聞こえましたから、中佐はもうそこにはいません。

私たちのこの番組も終わりに近づきました。いくつかまとめをさせてください。公開プロジェクトと CSETI（地球外知性体研究センター）のために活動してこられた私たちの軍側の助言者、元高級将校と語り合ったこの番組を、視聴者の皆様は楽しめたことと思います。ミラー中佐は映画『シリウス』に登場する予定です。これは画期的な出来事です。私は次のことも視聴者の皆様にお伝えしたいと思います。地球外知性体（おそらくは地球外知性体）の遺体を分析している上級科学者たちから聞かされた情報ですが、あの検体は 5 年から 7 年間生存し、流産した胎児でもなく、何らかの奇形胎児でもないことが確認されました。もしそれが身長 6 インチでかつ 5 歳から 7 歳だとすれば、これは世界ニュースです。映画『シリウス』の完成が遅れている理由は、遺伝子 DNA 検査を行なう実験モデルの準備が複雑であることです。この仕事はアイビー・リーグのある大学において最高の科学者、世界で最も卓越した遺伝学者の一人により進められています。彼はこの仕事に本当に徹底して取り組んでいます。ですから、私たちはこの科学者が彼の予備的調査の一部を完了するのを待って、（それは完全なゲノムではないでしょう）その情報と彼のインタビュー

ーを‘シリウス’に加えるつもりです。そうすれば、私たちはそれを人々に公表することができますでしょう。この春にはその結果が出てくることを期待しています。どうぞ最新情報にご注目ください。

さて、それでは、皆様はこのインタビューを楽しまれたことと思います。ミラー中佐には感謝を申し上げたいと思います。(彼はちょうどこの番組の終わりに帰られたようです) また、ワールド・ブジャ・ネットワークの皆様にも、隔週ごとにこの番組を私たちに提供してくださっていることに対し感謝を申し上げたいと思います。それでは、上を見続けよう... 次回をお楽しみに。私たちの新しいウェブサイトを訪れますと、これらのすべての様々な [リンクに] アクセスすることができます。ここは私たちのウェブサイトへの入り口です。それはシリウス [最後は打ち切り] www.SiriusDisclosure.com

(訳： 廣瀬 保雄)